

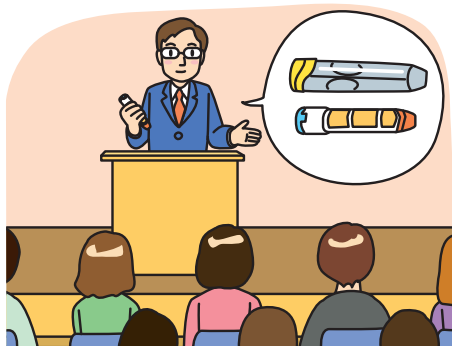
悩まなくてもだいじょうぶ



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子

イラスト／清水直子



第 41 回

食物アレルギー

調布市の検証委員会の報告は…

現場の理解を欠く

残念な内容

以前この連載でも触れたように、昨年12月、東京都調布市の小学校で5年生の女の子が、給食での誤食が原因のアナフィラキシーショックで亡くなる事故が起きました。市の検証委員会が今年3月、報告書を公表したのですが、現場の先生方の実情に理解を欠く残念な内容でした。

報告書は事故発生の要因を分析した上で、担任が「エピペン」を打たずに初期対応を誤ったこと、養護教諭が食物アレルギーによるアナフィラキシーであることを考えずに「エピペン」を打たず初期対応を誤ったことを指摘しました。また報告書では、事故が起きた小学校では平

成20、21年にアレルギー専門医による研修、同21〜23年度は「エピペン」の使い方のDVDを見る研修、同24年9月に事故を起こした直後にも校内研修を実施（講師は医師以外）したことに触れ、「研修に対する取り組み姿勢と危機管理意識の欠如があったと思わざるを得ない」と、二人の責任を厳しく追及しているのです。「母の会」は神奈川県との協働事業で、学校や保育所の教職員の研修を続けていますが、平成24年度の参加者アンケートで、研修を通じて「エピペン」を打つタイミングを「理解できた」人は、学校教職員では64%にとどまりました。アンケートは、

小児アレルギーに精通した専門医による1時間半程度の具体事例を引いた講義と質疑を通じて、食物アレルギーの病態の理解や「エピペン」の必要性、シミュレーションを通して行なう「エピペン」投与のタイミングの理解を図り、「エピペン」トレーナーを用いた実習なども行なった後に回答してもらった結果がこの理解率なのです。「エピペン」の取り扱いや十分な理解には、実効性ある繰り返しの研修が必要だと思います。

実効性ある研修こそ大事

この結果と比べると、過去に行なった研修の検証も行なわなかった調布市の検証委員会の結論は、あまりに先生方の実情に対する理解を欠いていると言わざるを得ません。実効性ある研修などの取り組みに責任を持ってこなかった教育委員会の対応こそ、検証されるべきだと思います。



そのべ・まりこ ● 神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』（南江堂刊）。